



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第10回】

美濃佐竹氏の事績

知られていない佐竹氏

JR東海道本線岐阜駅の中央北口を出て、知り合いが運転する車で岐阜県美濃市へ向かった。当日（4月23日）はあいにくの雨。美濃市は市域を長良川が流れ、「うだつ」が上がる町としても有名。ここに佐竹宗家から分かれた佐竹一族が鎌倉時代から室町時代後期まで約320年間、在住した。しかし、「地元では佐竹氏の存在は全くといっていいほど知られていない」。そう語るのは、現地を案内していただいた美濃市史編纂委員で美濃市文化財保護審議会の古田憲司会長。

歴史資料はそれなりに残っているのに目に見える遺構が見当たらない。佐竹氏の城郭や菩提寺など由緒の建物がまったく残っていない。菩提寺の「極楽寺」の大字名の地や美濃紙の「市」が開かれた「大矢田」の場所を尋ねてみた。やはり、建造物はなく、石碑などがあるかと思いきや、何も見当たらない。市内の2カ所の八幡神社も見て回ったが、同様であった。まるで、美濃市の歴史から佐竹氏の足跡が跡形もなく消えてしまったかのようである。しかし、美濃佐竹氏に関する歴史資料は厳然としてあり、その事績も歴史に埋もれることなく、輝いている。

美濃国内地頭と「承久の乱」

南北朝時代後期編さんの系図集『尊卑分脈』は佐竹氏4代秀義の注書きに「美濃国山田郷 地頭職始而拝領」と記す。この注書きから、これまで秀義が「美濃国山田郷」の「地頭職」を得たので一族が美濃国に住むようになった、とみられてきた。しかし、『尊卑分脈』の記述に昭和44年（1969）発行の『岐阜県史』（通史編・中世）が「あるいは秀義は季義の、山田郷は山口郷の誤りか」と疑問を投げかけた。

『岐阜県史』は「美濃国地頭表」を載せている。関東や奥州の武将が美濃国内の荘園や郷地を得て地頭となった時期などがわかる貴重な資料である。それをみると、承久3年（1221）に領地を得た

武将が多い。市橋荘の石川光治、大桑郷の逸見義重、伊自良郷の小田有知、山田荘の東胤行、円教寺の里見義直等である。いずれも「承久の乱」の時、北条氏側で戦い、手柄を立てている。もちろん、佐竹氏も秀義嫡男義重らが参陣し、功を成している。

『尊卑分脈』の秀義の注書きは、この「承久の乱」を背景に書かれた可能性が高い。佐竹氏も手柄を立てた他の武将同様、同時期に美濃国に領地を得たとみなされたのではないか。しかし、「同地頭表」は秀義に与えられた「山田郷」の所在を示す「郡名」のところに「？」が付けられている。思うに「山田郷」が美濃国のどこの「郡」にある郷かわからない、と受けとれる表示である。しかも「郷」と「荘」の違いはあるものの「山田荘」は下総国香取郡東荘（千葉県香取郡東庄町）を領していた東胤行に与えられている。

「住美濃国」の季義が初代

『岐阜県史』の「美濃国地頭表」から分かることが2点ある。1点目は『尊卑分脈』の秀義の注書きにある「山田郷」は存在せず、実在した「山田荘」と間違っただとしても「山田荘」は東氏に与えられていること。2点目は建武3年＝延元元年（1336）に「山口郷」と「上有智荘」、「弾正荘」の地頭として「佐竹義基」なる人物名が書かれていること。これらを踏まえると、佐竹氏を得た領地は「山口郷」と判断できる。

特に2点目の3つの郷・荘と共に登場する佐竹義基は、佐竹氏系図で最も古い『古本佐竹系図』（酒出季親所蔵）に出てくる美濃佐竹氏の武将である。義基から順に係累を遡っていくと、度義、定頼、定義、季義、秀義（佐竹氏4代当主）に繋がる。秀義の嫡男は5代当主義重（常陸介）。二男は義茂（南酒出）、三男は季義（北酒出、在京）とある。しかし、いずれの人物にも「美濃」に関する注書きがない。

美濃の文字が明確に記されている系図は『美乃佐竹系図』（清音寺所蔵）＝「続群書類従」収録＝である。秀義の三男季義の注書きに「住美濃国。

文永元年十一月卒。年六十三」とある。その季義の二男定義から続く子孫をみていくと、貞頼（定義）、度義、義基と続く。その義基の注書きに「美濃国山口郷。東西上有智荘。弾正荘也」とある。『岐阜県史』の「美濃国地頭表」の表記とぴったり符合している。

「一族中一人」義基が 北朝側で戦う

この佐竹義基は季義から数えて5代目の子孫。従って義基が山口郷などを有した建武3年（1336）から5代を遡る時期に季義は美濃に来ていたと考えられる。しかし、その時期が何年なのか、特定できていない。『佐竹家譜』は季義の注書きに「鎌倉に往て幕府に仕え、其勤勞に因て別に采邑数郡を濃州に賜う」と書いている。このことから美濃の領地は鎌倉幕府4代将軍、藤原頼経に仕えた季義に対する褒賞の地ではないか、と筆者はみている。

ではなぜ建武3年、義基がいきなり歴史に登場するのか。建武3年は足利尊氏と後醍醐天皇が対立、各地で軍事的衝突が起きていた時期である。美濃佐竹氏も季義二男定義の子孫義基が尊氏に味方し、定義の長男義資子孫の義孝（教）は後醍醐天皇側についた。その結果、義基が勝利する。そのことを『古簡雜纂』（埒忠宝編）収録の「足利尊氏御判御教書写」は「美乃国居住一族中一人令供奉之条殊以神妙、於恩賞者追而可有沙汰之状如件」とする。美濃佐竹氏の中で義基だけが尊氏に味方したと書いている。

尊氏はその恩賞として季義以来美濃佐竹氏が所領としてきた山口郷に加え、上有智氏所領の上有智荘と元皇室領だった弾正荘を与えた。1郷2荘を得た義基は、尊氏麾下の国人領主となった。さらに義基の子、義尚は室町幕府3代将軍、足利義満に弓を教える指南役に抜擢された。弓術と云えば小笠原氏も有名であるが、美濃佐竹氏も小笠原氏と同列になった。義基、義尚親子は在京しながら美濃佐竹氏の最盛期を築いた。

幕府「奉公衆」として名を残す

ところがその隆盛に暗雲がかかった。足利義満から「不忠」を理由に弓指南役の恩賞として義尚に与えられた山口郷などを没収されたのである。山口郷は相国寺に寄進されたことから佐竹氏側は返還運動を展開。結果、山口郷の東方は取り戻し

たが、西方は容易に取り戻せなかった。しかし、義尚の子孫は室町幕府の将軍直属の奉公衆」に選ばれ、歴史に名を残した。奉公衆は将軍外出時の警護や寺社参詣の随兵などを務める将軍直属の武士団。名の知れた有力武士で構成されていた。美濃佐竹氏が室町幕府内で一定の地位を得た点は大きな事蹟といえる。

美濃佐竹氏からは京都五山の上にあたる「別格」に位置する南禅寺の住持を務めた景南英文を輩出している。文人としても有名。こうした高僧の存在と共に注目されるのが系図の作成である。佐竹氏系図で一番古い『古本佐竹系図』は天文6年（1537）「書写」とある。天文6年は、義尚の子孫、基親（新介）が幕府の使者として初めて。関東に下向した年。常陸国に立ち寄った際、佐竹宗家側が貴重とみて書き写したと考えられる。

義親は天文6年も含め3回、関東へ下向。その後、永禄6年（1563）頃、佐竹宗家に戻り、家臣となった。この時点で北朝側についた定義系美濃佐竹氏は終焉の時を迎えた。一方、南朝側についた義資系美濃佐竹氏は各地に土着し、係累をつないできた、と考えられる。関西方面で佐竹氏を名乗る人々は、先祖が美濃佐竹氏に繋がっているのではないかと筆者はみている。

また、美濃紙を扱う「市」が山口郷大矢田で開かれていた。時期は山口郷が相国寺領となった頃とみられている。この美濃佐竹氏と美濃紙の関わりも気になる点である。320年余の歴史を紡いだ美濃佐竹氏。まだまだ、未知の分野が多く、その解明が待たれる。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



美濃紙の「市」が開かれていた大矢田の
十文字附近＝岐阜県美濃市大矢田